
神様と悪魔さま

相馬正

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様と悪魔さま

【Nコード】

N9132Y

【作者名】

相馬正

【あらすじ】

教会に暮らすエンティ・ティーは、そこで生活する当たり前のことに疑問を抱く。“神様”って本当にいるの？そこから彼女の生活は大きく変わる。悪魔の力を頼る彼女を待ち受けていたものは…。

R15は念の為です。 火曜・金曜7時更新の全4話（15部予定）です。

第一話 悪魔さま誕生

ここは町はずれにある静かな森に囲まれた小さな小さな教会。

—ここが私の家—

「こらトロン！ 顔を洗いなさい！」

いたずらっ子のトロンが、また神父様に叱られてる。

しかも神父様にがんじがらめにされて顔まで真っ赤だ。ジタバタしてみつともない。

そのトロンがこつちを見て私を指差した。

「エ、エンティーだって洗ってないよ！」

な！！ このクソガキ！

「トロン！ アンタ何言ってるのよ！」

まさかのお鉢が回ってきた。

ゆっくりとこちらを向く神父様。

「それは本当かい？ エンティー」

低く渋い声が私を問いたです。

ここは教会、嘘をつくことは許されない。しかも、この教会で唯一

大人の神父様は、大人ってことを差し引いても背が高く体格もいい。その姿で詰め寄る様は鬼神のようだ。そして…これまで誰も逆らったことはない。

「は…はい」

く…、このまま屈服して顔を洗うの？ 本当にそれでいいの“エンティ・ティー”！洗面台ではトロンが観念して顔を洗っている。なんて惨めな姿。いやっ、あり得ない！ あり得ないわ！ 今二月よ！

顔を洗い終わった他の子達は、とつくに食堂に移動していた。楽しい朝食を前に、私達の悲劇に気付く子は一人もいない。

「さあ、次はエンティの番だよ」

神父様がニツコリと私に微笑みかける。長身でイケメンという容姿に不釣り合いな“あごヒゲ”の両脇が上がる。既におじい様の域に入ろうかというのに、このスマイルがミサにくる淑女達を癒している。

く…カッコいい神父なんてズルいつ、反則だ。負けちゃ駄目エンティー、“いやだ”って言うのよ…。

「さあ」

「う…るっさい…！」

瞬間、場が凍りついた。

あの神父様に歯向かってしまった…。

トロンの顔が驚きのあまりとんでもなく不細工になっている。イケ

メンの神父様でさえ、呆氣にとられ口が半開きになっている。

「エンティー、顔を洗いなさい！」

「い、いやだ！ お水冷たい」

顔を洗うことくらいなんでもない…、トロンのやつが“ちくつた”のは許せないけど、それでも神父様に逆らうなんていつもの私だったら絶対にしない…。

この小さな反抗は、ほんのキツカケにすぎないのかもしれない。

「じゃ、じゃあ神父様のおヒゲはー？ 伸ばしちゃって不潔ー」

私は思ってもいないことを口にした。本当はそのヒゲもカッコいいと思っっているのに。

「毎日洗っている」

「剃ればいいじゃん」

「刃物は使えないのだよ」

「どうしてー？」

「私は神に仕える身だからだよ」

「…」

なんでこんなバカげた抵抗をしたのか、それがこの誘導尋問の為だと判った。

トロンがハラハラした顔で私達を交互に見つめる。

そうそう、コイツへの仕返しも考えておかないとね。まあ、お楽しみは後に取っておくとして…、それより今は、これから言わんとすることを頭の中で整理しておかないと。この機会を逃したら二度と言えないかもしれない。

でも、それを口にするのはとてもためらわれ、自然と口も重くなる。

本当なら素直に顔を洗えばいい…、反抗したことも謝ればいい…、そういつたいつもの自分を全て呑み込んだ…。

―決意を胸に口を開く、それは禁じられた言葉―

「ねえ神父様、“神様”って…本当にいるの？」

第一話 2

普段は開かない神父様の細い目が一瞬だけ開いた。

私の質問「“神様” って… 本当にいるの？」は、予想以上に破壊力があつたらしい。

「どうしてそんなことを聞くんだい？」

いつと変わらない落ち着いた声…、だけどその目は一点に私を捉^{とら}えていた。

神父様、怒ってる？ やつぱり少し恐い…、自分の体が小刻みに震えているのも判る。だけどまだだ…、もう口火は切ってしまったのだから。

「…だって、私にはお母様もお父様もないから」

神父様は大きな体をしゃがみ込ませて私と同じ目線になった。

「いいかいエンティー。お前がこの世に生を受けていること、それがご両親のいる証しなのだよ。みな例外なく平等に親がいる。ただ、必ずしも産みの親が育ての親とは限らないがね…」

私の抱えた疑念を少しでも拭い去ろうと、神父様は優しく語りかけてくる。言いたいことは判る…理屈だつたらいくらでも。

「ほっほ、私のご両親の代わりでは役不足だったかな」

けど…ズルい答えだ。

反射的に首を振り、伏し目がちになった。

神父様は嫌いじゃない。優しいし、背が高いし、髪もヒゲも白いけどハゲてないし、渋くてカッコいいし、とっても好き。言ったことないけど、本当はお父様みたいに思ってる。だけど…、それとこれとは別だ。話をすり替えて説得させられるほど子供じゃない。自分の中に生まれた疑念を…、キッチンと見極めるんだ。

「どうして私にはお家がないの？」

神父様の目が再び開いた。解き伏せたつもりの小娘が言い返したからだろうか、何にしても想定外に違いない。

「毎日朝を迎え、食物を賜り、働いて眠りにつく。そうして日々を過ごしているここがお家だよ」

「そうじゃない！ もっと普通の家のこと！」

何を言われようと私は退かない。理屈じゃないんだ。いつもと違う様子の私に、神父様も少し戸惑っている。

「どうしたというんだいエンティー」

「私…ずっと考えてたんです。教会に住まわしてもらっているのに、いけないことを…」

話が噛み合うはずなんてなかったんだ。だって私の中での結論は、神様がいるかどうかって疑問じゃなく、既に否定だったのだから。

―ひとつめの禁忌は“神様”の否定―

「私の知ってる神様は人を縛ります。それも都合の良いルールを創ってそれを破ると罪だなんて、私はそこに愛を感じません。無限の愛なんて存在しない。あるのは限られた愛…しかもその言葉は、世界を統べる為に作られた規律を“神様”って存在で刷り込んだだけの紛い物です！」

―そうしてもう一つの禁忌は…“悪魔”の肯定―

「悪魔は人を惑わします。ルールのない“悪行”へと誘う…、人の持つ悪さやズルさ、怖さ、憎しみ、妬み等からくる憎悪は一貫した破壊衝動を生みます。でも、それは誰もが持つてる感情で、時には規律や愛すらも凌ぐ力を発揮する…、そこにこそ真理があるんじゃないですか！」

これにはさすがに神父様が口を挟んだ。

「いったいどうしたというんだエンティー、神の愛は無限だ。人はみな平等なのだよ」

「違う！ さっきも言ったでしょ、無限の愛なんて存在しない！！」

思わず大声を上げていた。頭のネジが弾けてしまったような…そんな感じだった。

この二週間抱え込んでいた思いが溢れ出す。

「じゃあ…、じゃあどうしてカインは病気になったの！？ どうしてもういないの！？ 11歳だよ！ 街ではぶくぶく太った大人がたくさん歩いているのに、その人達とカインが平等だって言うの！？ そんなんで…どこに神様がいるって言うんですか！？」

一気に言い切って気が付いた。それらしいご託を延々と並べてみたが、その実、私の言いたかったことはこれだったんだと…。

「…」

神父様にとってもカインのことは痛い傷口だったに違いない。私の卑怯なカードにしばらく黙り込んでしまった。それからしばらくして、神父様はゆっくりと口を開いた。

「私は…神の教えを伝えはするが、それを信じなさいと言うつもりはない。信仰とはあくまで己の自由だ…。しかし、信じる者には必ず救いが訪れる」

「私が求めているのは救いじゃない！ 自分が信じるに足る信念を求めているだけ！ それは絶対の存在じゃなきゃいけないの！ だから神様ではそれに足らないの！」

「…」

神父様は何も言い返してこない。

そりゃそうよね、信仰自体は人それぞれって神父様が今言ったんだから。

「そもそも私、神様なんていないと思ってる」

「な、なんという事を…、いや…お前が神を信じられないと言つのは、私の不徳のいたすところか…」

と言いつつも、神父様は体をぶるぶる震わせている。

ありゃー、これが一番凄い発言だったのかな…？

「違うの神父様、これは私のワガママで勝手な考えです。だって、神様って人の形してるから…、いかにも他の動物や虫、生き物すべてを見ていない人目線でしょ。だから神様っていうのは人が考え出した言わば偶像なんです」

私の偏った考えは間違っているのかもしれない。でも…このまとまりつつある考えが、今の私の想いに唯一答えてくれる依り代なんだ。

「良い行いは神様、悪い行いは悪魔、どちらも人の持つ感情を何かに言い換えただけ…、だとすれば神様も悪魔も同義ってことです。それなのにどうして“神”には様がついて、“悪魔”には様がつかないの？」

“神様”だけ信仰したり崇めるのはおかしい…。この時の私は国や地域によつては邪神が崇められていることを知らなかったけど、考え方は似ていたのかもしれない。

“悪魔”の方が姿形も多様で、欲望や憎悪という感情から破壊に至る行動まで広義に亘る。どうしてだろう、整理すればするほど神父様の教えとは違ういけない方向にまとまってゆく…。この結論が何をもたらすのかは判らない、だけど、私の中では“悪魔”>“神様”なんだ。

「神様よりも悪魔の方がずっと絶対的で、私の求める信念にずっと近い存在なんです！」

いつの間にか私だけがずっと喋っていた。まるで私とは別の意思を持った“何か”がそうさせるかのように、それは己の中に留めておくには余りある力で、自ら外に出ることを望んでいるようだった。

「だから敬意を込めて、私だけでも“悪魔さま”って呼んであげるのが！」

第一話 3

この時、明らかに私の周りには異変が起こっていた。それは、いわゆる“邪気”と呼ばれる類の気だったんじゃないだろうか。冷たい空気が痛いほどに肌を打つ。

「…ティー、エンティー！ もうやめなさい！ エンティー！」

気が付くと、神父様が私の名前を叫んでいた。

無我夢中で喋っていたせいか、ずっと呼ばれていたのに気が付かなかったみたいだ。いつの間にかトロンの姿もない。

もはや自分の意思なのか、それとも抑え切れない力に動かされているのか、自分自身でもわからないまま、しかし止まらない。勝手に口は動き続ける。

「お願い“悪魔さま”、私に貴方の力を貸してほしいの」

「やめなさいエンティー！！」

辺り一面を薄暗い霧が包み始めた。私の周りは一層深い闇が渦巻き、さらに目に見えるほどの黒いうねりとなって私の目の前にできあがっていた。

ここが闇の中心…。

その渦は吸い込まれそうなほどに深く暗い闇だというのに、とても眩しく感じた。あまりの眩しさに目を細めた時、その先に形あるものが見えてきた。それは今まさに形づいており、徐々に“何か”が実体化されようとしている。人と動物とが入り混じったようなそれは…間違いなく野獣や魔物の類이었다。

そんな有り得ない存在を目の当たりにした自分が抱いたのは、意外にも驚愕や恐怖ではなかった。

「綺麗…」

神父様の反応は私とは真逆だった。『なんとまがましい…』と呟き、たじろいで険しい顔を見せている。

まがましい？　って何を言ってるんだろう。こんなにも黒く美しい光を放っているというのに。

この時の私の感覚は異常だったのかもしれない。

そして、黒い光が私に語りかけてきた。

『我を喚んだのはお前か』

まさか…本当に？　これが、悪魔…さま？

「そ、そうよ」

『名は？』

「いかん！　名前を交わしてはならん！　な…、なんだ！？」

神父様が駆け寄ってきたが、一層闇が濃くなっている私の近くには来れないようだった。

「私はエンティ・ティー。貴方は？」

『我はたった今誕生した。名はまだない。お前がつけよ』

「え、私が…」

「よせ、いかん！　よすんだエンティー！」

ごめんなさい神父様。エンティーは悪い子です。神父様を一瞥すると、闇に目を向けた。

『さあ』

私が求める絶対的な存在ってなんだろう…無限の愛なんてものがあるのだとすれば、それは…

どんな過ちを犯した人間でさえも神様に許しを請う、そして全ての罪を許す、さらにそれらを背負う。そんな…“善”という行為において絶対的な存在…そう、例えるなら“イエス様”のような…。

今の私は真逆に向かっているかもしれない…けれど、絶対的な力を手に入りたい…、だったら…。

「わかったわ…、じゃあ、アナタの名前は“ノー”よ」

名前を呼ぶと、ぶわつと闇は範囲を広げ、神父様を覆ってしまった。その瞬間、“ノー”と名付けた悪魔さまは実体を現した。黒く輝く魔物。羊のような角を生やし、牛のような顔、あらゆる生き物や植物を合わせたような体…。

「うおっ、くっ、なんということだ、私がついていながら…」

神父様は身動きが取れなくなっていました。既に部屋中を覆っているこの闇のせい…？

『そうか、我の名は“ノー”か。これで契約は完了した』

「契約？」

『そうだ。お前が我の主あるじとなったのだ。さあ、破壊の限りを尽くそうぞ』

「駄目に決まってるでしょ！」

『又…、なんだと？』

「なんということだ…、なんということだ」

神父様は目の前で起こった魔物の誕生に狼狽うろたえていたが、すぐに悪魔さまを退治せんと怪しい呪文を唱え始めた。

こんな有り得もしない状況を前に、私はなぜか冷静でいられた。これは私の望んだことなんだ。私自身が願い、そして叶えた…世界を変えた第一歩なんだ。

「やめて神父様！ 悪魔なんていないって言ってるでしょ！ 神も悪魔も存在しない。ここにいるのは私の想いが実現化した“悪魔さま”よ！」

「まさか！？」

『察しがいいな神父。我を消すことは、エンティ・ティーを消すことと同じだ』

「そういうアナタは察しが悪いわね、ノー」

『ナニ？』

「破壊の限りをつくそう？ ナンセンスもいいところだね。破壊すべきものは私が決める。この世を…ひっくり返してみせるわ」

暗い部屋の中、その中心に位置する黒く輝く魔物は、薄っすら笑みを浮かべたように見えた。

『ほう…、面白い。我は退屈を望まない。主の考えを聞いてみようではないか』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9132y/>

神様と悪魔さま

2011年12月9日07時47分発行